
明露神奇談

ソラツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明露神奇談

【Nコード】

N1385Z

【作者名】

ソラツキ

【あらすじ】

純和風な風景の中に佇む一軒の店『明露』にやってくるのは、いつも変った事情を抱えた客ばかりだ。極度の迷子体質、幽霊、神様…さまざまな事情を解決しながら、”あるがまま、なすがまま”を愛し生きているモノたちの、和風テイストなホラーファンタジー…であればいいなと思っています。

其ノ巻

「なんなのよ」

口をついた言葉は、悪態だった。

軽く頭をかいて、私は辺りを見渡した。じやり、と足の下の砂利が鳴る。

そこはどこかの裏道らしく、人気は無い。さらにしばらく放置されているようだった。日光を一心に受けて育った、初夏特有の鮮やかな緑色をした下草が目にもぶしい。人がかるうじてすれ違えるような狭さの道の両脇にはブロック塀がある。その崩れ具合がかなりの時間そこに存在していることを証明してそれを覆う苔が一層雰囲気を引き立てていた。塀の向こうに植わっている木々が、その路地に枝を伸ばして揺れている。

そう、まるで純和風な風景である。

だが、ここは決して私の目的とした道ではない。

「どうして毎回こうなるかなあ……」

誰に言っているわけでもなく、強いて言うなら自分自身に対して、嫌みたっぷりに溜息を吐いた後止めていた足を再び動かした。そして辿りついた十字路の左右を確かめて、もう一度大きく息を吐き出す。

誰だって、地図も持たず知らない道を行くと、迷うこともあるだろう。だが、私の場合はその機会が特別多かった。

私の前に、迷わない道は無い。

言うなれば、極度の迷子体質なのである。

一人で出歩けば、必ず目的地には辿りつかない。たとえそれが自分の家への帰路だったとしても、今のような状況に陥る。何故数軒先の八百屋にさえ辿りつけないのか、自分でも理解できなかった。

だから極力人の多い場所を選んでいき、道を尋ねながら進んでいくことを心がけていたのだが。

「すみませーん」

口に手を当てて気持ち叫んでみるが、さわさわと緑風が駆け抜けていくだけであった。どこかの屋敷の裏のような道なりなのだが、どういふ地形なのか全くもってわからない。記憶を手繰り寄せせてみても心当たりは無いから、多分はじめて通る道だ。仕方なく左に足を向けて再び歩き出した。

日は少し西に傾いたようだ。今日はいつも霧に包まれているこの地域にしてみれば稀にみる晴天で、本来空は真つ青に透き通っているはずなのだが、一心に光を拾い上げ風に揺れている葉に邪魔されて緑の天井しか見えない。その黄緑色に透き通ったフィルターからキラキラとこぼれおちる柔らかなクリーム色の光は木々の着床植物をも照らし出して、まるで輪郭を失いぼんやり光っているようだ。

この路地全体が緑色の空間となっていた。

ふと風が吹いて振り返っても、爽やかに雑草と呼ばれているものが揺れているだけだった。

「本当に、誰もいないのかしら」

不意につぶやきが漏れた。ふと思ったことが自分の意思とは関係なくこぼれおちていったという感じに、だ。そしてそのおかげで、緑の誘惑からはと我に返った。

人っ子ひとりいないのは気付いていた。猫一匹いないことにも気づいていた。けれど夏真つ盛りの真昼間に蝉が鳴いていないことは気付かなかった。もっと言うと、空を自由に飛び回っているだろう野鳥の声すら全くもって聞こえなかった。

誰もいなかった。

ただこの小路だけどこかから切り離されてしまったかのようで、目のくらむような輝く初夏の緑の道に先は見えず、永遠と続いてい

るように見える。

緑色の箱の中に閉じ込められてしまった。

そう感じた瞬間から、体中緑に蝕まれ、染まっていくような感覚に陥って、目が回り立ちくらみが襲う。

何か他の情報は、と全神経が外界へと向けられた。

ここは、一体どこだ。

「あの、」

「ぎゃあああああああ！？」

「うわええええええええええ！？」

全く予期せぬ事態に盛大な悲鳴を上げると、後ろから掛けてきた声も驚いたような声を上げた。少々の恐怖を抱いたまま弾かれたように振り返ると、すぐ後ろに少年が立っていた。

無造作に切られた青黒の髪と同じ色をした大きな瞳は、より一層開かれて驚きの表情を隠そうともせず写していた。背は私の視線より少し低めのところで、まだ幼い様子の残る十二歳くらいの顔立ちだ。常磐色のフード付きパーカの上にクリーム色のエプロンをつけていて、大きく膨らんだ紙袋を抱えていた。

「どどどどどうしましたかっ！？な何か、あつたんですかっ！？」

目をまん丸にして私以上に動揺する少年に、一瞬呆けてしまう。そしてこのどもりまくる少年の自分に対する危険性を計算してみても息をついた。まだ心臓が早い。

「うん、君が」

「……ええええ！？ば、ボクですかっ！？」

え、何で！？と少年は混乱した様子で言う。私は苦笑気味で言った。

「急に後ろに立つちゃダメだよ。焦るから」

「あ、背後をとるなってやつですね」

「……ちよっと違うかな」

それは急に現れながらも、こちらに警戒心を与えない、どこか和やかな雰囲気を漂わせていた。その雰囲気不安定だった精神は飲まれ、流され始める。そして、ふいにはたと思ひ出す。

「……君、いつからいたの？」

え、と少年は私を見上げた。

「さっきですけど」

少年の大きな瞳に、眉間にしわを寄せた自分の姿が見えた。さっきって、いつだ。

「ところで少年、どうかしたの？」

だいぶ落ち着いた様子の少年の前に、視線を合わせやすいようにしゃがみこむ。

「…あ、ああ。えっと…どうしてこんなトコにいるんですか？」

屈託のない表情で、少年は問う。私はふと、首をかしげた。彼の問いにはではない。確かに、質問を鏡で反射させたかのような回答にも疑問を持つのだが、もつと何か、違ったもので、だ。私は、一番目立つが一番おかしいところを見逃しているような気がしてならなかった。それは、のどに刺さった魚の骨のように、地味に神経をつついてくる。

「“どうして”って？」

聞くと少年は少し驚いたような表情をして、年ごろに似つかわしくない難しい顔になった。

「ええ…つと、だって、ここは見ての通り人少ないですし。人がいるのは珍しいですから」

どうされたんですか、と繰り返す少年のセリフを深く考えもせず、ふーんと見てやる。このとき私の頭の中は喉の骨のことしか考えて

いなかった。けれど、それだけでこれほど物事を深く考えないというわけではないと思うのだ。多分私の頭は二十%ほどしか動いていなかったに違いない。この少年の空気が麻酔のような働きをしていて、何もかも流してしまうように、私の本能的に危機を感じる部分を麻痺させていたのだろう。だがそんなことに気づいてもいない私は、ある程度整っていて、将来期待できそうな顔立ちから、特に気になる点は何もないと判断を下した。

「迷ったのよ。路に。ねエ、x x 町ってどっちにあるの？」

私の問いに対して、少年は少し考えるような素振りを見せて、少し悲しそうに首を振った。

「…わかりません」

「…そっ…か……」

無意識に止めていた息を吐き出す。

ありがとね、少年も早く帰るんだよ、と立ちあがって、ついでに頭を数度軽く叩くようにして撫でて、踵を返した。しばらく歩きながら道を考えてみるも、どうしても今日中に帰れる自信がなく、先程より幾分か体が重くなったように感じた。少し涙が出そうになったが、一切無視した。

「…あのッ」

少し硬い声が後ろからした。不思議に思い振り返ると、少年はまだその場に突っ立っていた。辺りは暗くなり、少年の顔も闇に溶け込んでいて、表情を確かめることもままならない。

「ここは街灯もないので、一人で歩くのは危ないですよ」

自分より年下に言われるのもなんな話なのだが、私は返事もせず、一度放棄した感覚をもう一度洗いなおす。何がおかしいのかを、正常に動き出した脳で必死に探すため、じっと目を凝らして、少年の様子を観察した。少年の声は続ける。

「えっと…この近くに、ボクのお世話になってる店があるんですけど、」

ざわり、と風が吹いた。

ぞくり、と寒気が走った。

何故かは、まだ、分からない。

「寄って行きませんか？」

かくり、と影の首のあたりが横に傾いた。

「…あ」

そう、私はそこでやっと、理知的な面で気付いてしまったのだ。

単純な話だ。何故気付かなかったのかと不思議になるほどだ。まず第一に、人の形をしたその気配は、何も無いのと、等しいくらいに、全くと言っていいほど感じられなかったのだ。首を傾げたのであるう動作から連想したのは、指で小枝の先を折った時のことで、目に見えて生きているようには見えなかった。

ああ、そうだ。やっとわかった。

なあんだ。なんて簡単なことを、私は見逃していたんだろう。

頭の片隅にいる冷静な私が言うことを、ぼんやりと聞いていた。

“彼はヒトで、無い”んだ。

ぞわりと、今度は身に覚えのある寒気が走った。

「…いいッ！！自分で何とかする！！大丈夫だからッ！！」
思わず叫ぶ。

少し赤味を帯びている空のせいか、緑の者たちは先ほどまでの爽やかさを全く残しておらず、おどろおどろしく私に纏わりついてくる。街灯は一つもない小路で、私の神経は鋭く、ヒステリックをも起こしかけていた。

「でもっ、迷子、なんですよね？」

私の心境の変化に気づいていないのだろう。じゃり、と一歩踏み出す音がして、心臓が飛び跳ねる。

「み…道、思い出したのッ！！こっちだったからッ！！」

そう言って、彼のいない方向へ後ずさった。じゃり、と引いた右

足に、妙な冷気を感じる。瞬間、少年らしき物から刺さるような空気が流れ込んできた。緊張が体を駆け回る。

「茜藍さん」

これまでの姿からは考えられないような鋭い声が発する言葉が、パニックに陥っていたはずの私をその場で凍らせる。逃げなきゃ、と思っていたのにどうしても体が動かない。目の前が、頭の中が、真っ白になる。

「何で……」

闇しか見えない。そこには、“誰” もいない。

「何で……」

ねえ。

何で、私の名前、知ってるの？

「そちらの方向に、それ以上、一步も、踏み出さないでください」少年は私のパニックを一瞬で支配した後、いいですね、と、その・”少年”には似つかわしくない静かで、少し厳しさが混じった声を発した。

「……………」

冷汗が、流れる。まるで金縛りを受けていたかのように固まっていた私の体は、無意識のうちに気おつけの体勢で”影”の方を向いていた。

「ひとまず、店に行かないと……」

影が少しでも焦燥感を滲ませた呟き声を零した時、右の視界の隅が淡く光った。

こう不可思議なことが立て続けに起こると次は何かと身構えているもので、私もそれに瞬時に対応することができた。金縛りから解放され、そうしてやはり、目を見張る。

そこにはレンガ造りの立派な建物が、厳かに佇んでいた。

それはこの通りにはあまりにも不釣り合いで、しかし決して違和感を与えることはなく、周りに完璧に溶け込んでいるようであった。まあ明るくないので、断言はできないが。

「ああ、店です!」

近くにあつたんですね!と叫びながら、先程の空気を放っていたなんて想像もできないような無邪気な様子で、その建物に駆け寄ったが、私はそこから動かなかった。金縛りなんてものではなく、動けなかった。何が何なのか、情報処理が全くもってスムーズにできていない。近くにあつたではなくて、近くに現れた、というのが妥当なのでは、と少年の発言に反論するのが精いっぱいだった。

「茜藍さん?」

暫くして、私に来ていない事に気づいた少年が振り返る。建物自身の明かりでぼんやりと照らされた顔は、不思議そうに私を見ていた。

「入らないんですか?」

それが当然のように、少年は言う。それに応えて、自分の右頬が引きつるのを感じた。確かに迷子で道聞かなきゃなんないのはわかっているが、何一つ解決しないまま”何か”分からないモノとの接触は、本能的な部分から抵抗している。

どうやって逃げようかと必死に考えていると、体がぐらりと揺らいだ。

「…わっ!?!」

何事かとそちらを見ると、少年、が私の腕を引いている。

「や、やめてっ! やめてよっ!」

反抗を試みても、全く意味がなかった。どっからこんな力出んの!?!とパニックは続く。

「やめてっ!?! やめてっ!?! やめてっ!?!」

怒鳴ると、少年がこちらを見た。何の曇りもない瞳だった。

「どうしたんですか？」

「どうしたって…放せって言ってるの！！」

「何ですか？」

相変わらず、不思議そうに少年は問う。

「何でも何も、アンタぜんっぜん気配ないし！何なのよ！？何者！？」

この会話が成立している最中も、私はどんどん建物に近づいていく。もう嫌だ、投げ出したい。

「え…？あ、まだ言ってますでしたっけ？」

え、と少し緊張して顔を見た私をよそに、少年はにっこりとまるで天使のように微笑んだ。心配はいりません、とでも伝えるかのように。残念ながら、凍りきった私の頭には死を誘う残酷な笑みにしか映らなかつたのだが。

「ボク、刻辰^{トキタツ}って言います。トキでいいですよ」

「……名前じゃなああいつ！！！！」

タンタンタン、とリズムよく階段を上り、ドアの前まで来た。

ここまでできたら、腹をくくるしかない、と口をしつかりと結ぶ。

もう知らない。なるようになりやがれ。

ガラスののぞき窓には濃い緑色のカーテンが隙間なくひかれてあって、一つの看板がぶら下がっていた。

中央に銀文字で二語。

？明露？

「ガイ…？」

その瞬間、ドアが開いた。外は光っているにも関わらず、中は真つ暗だった。

「わ……」

その黒さに息を飲んでいると、トンと背中を押された。体が、前に傾く。

「……え？」

「ただ今戻りましたー！」

そう言いながら少年も一歩踏み出し、空間は外の世界と遮断されていく。

「え、嘘。ちよ、まつ……」

私の声は無情にも届かず、パタムと音を立てて戸は閉まった。

彼らは、それが始まりだったという。

これが私の、？メイロ？の始まりだと

其ノ貳

其ノ貳

「ただいま戻りましたー」

その高らかな宣言に、底なしの闇は少し驚いたようだったが、すぐさま声の欠片まで残さないようにとどんどん飲み込んでいった。私は少し身じろぎする。その気配に気づいた闇は、一通り食事を済ませ自身の威厳を完全に取り戻したのか、やってきた侵入者に目を光らせ、じわりじわりと迫ってくる。私は圧迫感を感じて来た道を振り返ってみたが、真つ暗闇しか見えない。

隣から全然見えませんね、と私の心の内を察して言ったような妙に息の合った声が聞こえる。ただ、彼はこの闇に慣れきっているのか、焦りの要素を全く含まない声色だった。

「茜藍さん、近くに紐が垂れているはずなので、引っ張ってください」

するりと手が離される。しめた、とそのまま逃げようとしたが、全くもって体が動かない。一瞬何が起こったのか分からなかったが、ふと思いついてゆっくりと意味もなく刻辰が立っている辺りを振り返る。彼の気配は相変わらずどこにもなかったから、ここにいるだろうと推測でしかないのだが、しばらく睨み、息をつく。

「…紐？」

どうにも、名前を呼ばれると、相手の意思に従ってしまい、自分の思い通りに動けない。

そのまま、抵抗も出来ず素直にその紐とやらを探している自身に呆れつつ、自分の周囲を見渡す。そして自分の目には黒しか飛び込んでこないことに気付いて、思わず失笑してしまった。何も見えなからその紐とやらを引っ張れと言われたのに、それを視力で見つけようとしたなんてなんて間抜けなんだ。

そんな風に、完全に油断しているときだった。

「右手を挙げて」

耳元でダイレクトに声は聞こえた。闇に完璧に溶け込んだ存在が発した声は、刻辰のように高くは無く、ましてや自分の声とは全く違ったテノールは、笑っているような、楽しげな声色をしていた。突然のことに声も出ず、飛び上がったままって一歩退くと、鈍い金属音とともに地味な激痛がふくらはぎに伝わってきた。

「ったい!!」

「え、どうしましたあ!?!」

刻辰の絶叫が闇を貫く。それにもかき消されずに、鼻で笑う声ははつきりと聞こえた。私のことを馬鹿にして笑ったのだと一瞬で理解し、顔も見えない誰かに多少の怒りを覚え、声のした方を軽く睨む。

と、左腕に圧迫感を感じた。

「うわっ!?!」

そのまま手の甲が弧を描きながら180度動かされ、ひじから直角になるような形で止まる。

「ハイ、握る」

声は私に言い聞かせるように、何故かイラッとするほど丁寧な口調で言った。

「……………」

宙を握る。確かに、手の中に紐のそれと似たような凸凹した感触がしたと思った瞬間、支えていた力が急に消えて、重力に逆らうことなく、先ほど描いた弧を逆戻りして左手が落ちていく。

「うわあっ」

反動で思わず座り込んでしまったのと同時にカチツというスイッチ音が聞こえた。次の瞬間私を中心とする半径10m以内がぼんやりと照らされる。自分の影を発見して、何が起こったのか確認するため仰ぐと、三日月が今私の握り締めている臙脂色の紐と繋がっていて、薄暗い光を放っていた。

「うわー」

何これ、と数秒真剣に眺め、変わった電球もあるもんだと感心しながら視線を下ろしていくと、目の前の男と目があった。掴まれたときの手の向きや、声の発信源を推測すると私の後ろにいて思っていたのだが、私の数歩先に立っていた。

気づかぬうちに音もなく私の前に移動したかのようだった。

無遠慮にじろじろと視線を投げつけ私を観察している。何がそんなに珍しいのかと自分の服装を確認し、私は首をかしげた。高校生の自分より、相手の方が、よっぽどおかしな格好をしている。

髪も右目も黒色なのだが、周りの闇が黒の絵具一色で塗りつぶされているようなものである分、漆喰を塗ったかのようにしつとりと艶を帯びている。ただ、肌は石英のように不気味なほど不健康に白く透明感があつて、まるで日の光を覚えていないようだ。そして極めつけはひどく整った顔の目を前髪で隠していることだ。その左目が使えているのかは決して聞くべきじゃないだろう。服装は、真っ白なカッターシャツに黒いリボンをだらしなくネクタイのように結び、その上に地に届きそうなくらい丈の長いコートを羽織っていた。

要約すると、モノクロ男だ。

私はそんな風に思っている事を悟られないように、ただ、未だに浴びせられる視線に対してはどうにも出来ず、ぎこちない笑みを相手に向けて軽く会釈する。

「ど、どうも」

「どーも」

男は眉間に寄っていた皺を解散させ、一瞬で薄笑いを浮かべて返事を返す。その笑みは反射的に作られたため、多分彼にとっての営業スマイルだろう。

ひどく人を魅了する、常人とは思えない魅惑的な笑顔なのだが、私は馬鹿にされているのかと根拠もない不安を煽る、不安定な笑みだ。それに、軽く目を見張る。

「ああ、闇夜^{アンヤ}さんだったんですか」

私たちの数秒間のやり取りの間で、明るくなり状況を把握した刹那が、安堵の息をつきながら寄ってきた。そして笑顔で闇夜を見上げる。

「ただいま戻りました」

「うん。ずっと聞こえてたから」

表情を崩すことなく向かい合う二人を見て、その笑顔の差に驚く。まるで天使と悪魔だと思ったときに闇夜がこちらを向いたため、思わず肩が跳ねる。

「そんなに緊張しなくていいから」

くすくす笑った後、彼はふと顔を顰めた。

「それにしても遅かったね。いつ会ったの？」

「さつきです!!」

即座に刻辰が答えて、闇夜の視線がそちらに移る。私はひっそりと息をついた。あまりにも整いすぎた顔は、薄気味悪くてしょうがない。

「…さつきっていつ」

「僕が買い出しから帰ってきて、店の前まで来たときです!!」
声に棘を感じるのは私だけだろうか。

言われてる本人が全く気にした様子もないので、私は勘違いだと思っことにする。まるで敬礼をしそうな勢いで報告する刻辰のだが、残念ながら両手は戦利品である買い出しの紙袋で塞がれていた。……最初からそう言っていれば、俺は二度も口を開かなくて済むんだよ?」

「そういえば、玉兎キョクトさんは？」

闇夜の黒い笑みをスルーして、少年は笑顔のまま口を開く。

「奥にいるよ」

それすら全く気にしていないように闇夜は返事をし、闇を振り返った。

「玉兎、帰ってきたよ」

何があるのか気になって、ひょいと背筋を伸ばして見てみると、

ゆらりと闇が揺れる。

「……遅かったな」

先ほど誰かが言った言葉を、低くかすれた声が気だるげになぞる。
「玉兔さん、先ほど戻りました!!」

「だから聞こえてるって。しつこいよ」

二人のやり取りの最中に、玉兔という名らしき人物が現れた。

杉の木肌のような渋い茶髪を少しくすませた瞳が、楕円形の硝子越しからこちらを見ている。隈こそないが、かなり疲れているような表情のせいで、闇夜と同じか少し年上程度なのだろうが、かなり老けこんで見える。群青色のタートルニットの時から、刻辰と同じようにエプロンをつけていた。図書館司書というレッテルを貼り付ける。

「……何買ってきた」

迎える言葉もなしに、彼は疲れの滲み出ている声で重々しく尋ねた。それを全く気にした風もなく、トキは袋の中を覗き込む。

「えっとですねえ……ねじと、歯車と、木材と……」

「俺が頼んだホットチョコ」

ガサゴソと音を立てていた刻辰に、左手を差し出して闇夜が言う。音がたつぷりと十秒ほど止まった刻辰に対し、早く、と急かし声が闇に染み渡る。

「か、買い出し行ってきますっ!!」

紙袋を地面に置いて、刻辰は全速力で闇へと消えていった。急に沈黙が押し寄せてくる。

「……じゃ、私もこの辺で……」

あの鳥頭が…と呟いている闇夜となるべく視線を合わせないよう
に気をつけながら立ちあがると、一步退いた。再び襲ってきた痛み
に振り向くと、事務机が4つ置いてあった。それが何の意味がある
のか分からないが、本当に何かの事務所なのかと納得しつつ、さら
にその場を退こうとする。

「…闇夜」

司書が口を開いた。そのあまりに深刻そうな響きに何事かと思わず顔を上げると、茶色い瞳とかちあった。

「……え。え、…な、何ですか」

「どうかしたの」

闇夜は不思議そうに、自分より少し低いリーダー格を眺めている。私はというと、またじりつと引いては見るが、机が邪魔でスムーズに下がることもできなかつたため、仕方なく軽く身構えてみた。まあ若干眉間にしわのよっているその表情に、勝てるわけがないとは分かってはいたのだが、唯一出来る抵抗だった。そんな三つの瞳に見守られて、玉兎は言葉を放つ。

「…誰だ、コイツは」

「…あ、完全に存在を認識していなかつたんですね。私は単にスル―されているだけかと思っていましたよ」

早口で対応する私に代わって、闇夜は後ろを向いて震えている。

時々、こらえきれないと言ったように笑い声が聞こえてきた。

「……………」

「ぎよ、玉兎ツ…そ、それはねツ、せ、せーっは」

「ああ、茜藍か」

彼はすぐに無表情に戻って、あくまで自分のペースを保つたまま何事もなかつたかのように頷いた。よく来たな、なんて言っている。そんな彼に、私は状況についていけなくなり、は、はあなんて言いながら軽く頭を下げている。けれど、まだ冷静な部分はちゃんと残っていて、何故、闇夜が言った“せー”という言葉だけで私だと分かったのだらうとか、さらに続く歓迎の言葉に疑心を持ったりだとか、ちゃんと正常に動いていた。それはまるで私が前々からここに來ることになっていたかのような言葉ではないか。

はと、新たな予感に再び身構える。

これは、誘拐ではないのか。

どこぞの組織か知らないが、そして何故私を狙ったのかは知らないが、緊張が走る。身代金を要求されたって、そんなものうちには

ない。

「よし、ではひとまず、歓迎しなくてはな」

「…はい？」

比較的穏やかな表情になった眼鏡に、立ちなおったモノクロも同じように頷いている。

「そうだね。こんなのも、一応大事なお客様だもの」

「こんなのってどういうことですか。って、え？客？」

あれ？と首をかしげる私に、玉兎は一つ頷いて、相変わらず厳かに言った。

「？明露？へようこそ、茜藍殿」

「…と言われましてもね」

どういうことですか、と続ける私に闇夜が不思議そうな顔をする。

「え、そのままの意味だよ。歓迎してるってことだけど。そんなことも分らないの？」

「…いや、それはわかるんですけど。え、私拉致されたんじゃないんですか？」

大人二人の呆け顔が私の目に映った。どうやら、私の新しい推測は本当に間違いだったらしい。

「…せーらん、俺たちを何だと思ってるの？」

「私は“明露”のオーナー、玉兎だ。“契換屋”をやっている」

訝しげに言っている闇夜と、無表情で説明をするそれぞれから視線を外した。思わず声が小さくなる。

「お店、ですか」

「そつだよ。他に何があるっていつの？」

「…へえ、私お客さまですか」

何故か、引きつった笑みしかできなかった。明らかに、客に対する対応とは思えないのだが、コレは私の常識だからだろうか。

一刻も早く帰りたいと一瞬思ったが、まだ返してくれそうにもないので、話だけでも聞こうとリーダーの続きを待つ。が、無表情はどこまでも口を閉ざしていて、もう新たな情報を取り入れるのを諦めかけたとき、闇夜が口をはさんだ。

「いわゆる質屋だよ。モノを取り扱っているんだ」

「…へえ」

「……興味、なさそうだね」

どうしたの、と言っている闇夜を見上げる。しばらく目があつた後、少しだけ目を輝かせて闇夜が口を開いた。

「…凄い、ねえ玉兔。俺目が死んでるヒト、初めて見たよ」

それを華麗に無視し、玉兔に向きをなおる。

「あなた達は、誰ですか？何者？」

「え。だから、彼がオーナーであり契換屋を営んでいる玉兔で、俺は通称“運び屋”の“移物屋”をやっている闇夜だよ。玉兔なんかほんの少し前に自己紹介したよ？頭大丈夫？」

何故、コレだけ人の神経を逆なでる技術に長けているのだろう。

心配した表情はムカつくほど仰々しくて、思わず睨んでしまった。

「わー睨んだー。こわーい」

最近では女子高生でもこんなノリではないだろうが、二十前半の男性がするような反応とは思えず、私は呆れて反応すらできなかった。もう考えないようにしようと、無駄な思考を振り払い、玉兔に向きをなおってみるが、オーナーと呼ばれている人物は、何か書類整理を始めていて、私たちは完全に視界に入っていないようだったが、そのまま放置されても困るのだ。私は眉間にしわを寄せて彼に話しかける。

「貴方が契換屋なら、明露って何ですか」

「明露とは、それぞれ個々の店が集まって出来上がった施設だ。何でも屋に近い」

顔も上げずに返ってきた返答に、成程、と納得した風をして見せた。

「…じゃあ、トキも何かやってるんですか」

「あいつは？ねじれ屋？。時計屋だよ」

思わぬ回答に、弾かれたようにモノクロを仰いだ。一生懸命に時計を組み立てている少年の姿を想像してみる。

「あんなに幼い子が？」

「アイツを何歳だと思ってるの」

ハハツと馬鹿にしたような笑い声を聞き流しながらしばらく情報処理を行って、怒りともども落ち着くのを待つ。

「…拉致したわけじゃないんですね」

「だからさ。かなり失礼な想像してない？俺たちを何だと認識してたの？」

ぼそりと呟いた独り言を素早く拾い上げた男に、真顔で返してやる。

「だから拉致組織」

このとき初めて、この男の顔を引きつった笑みにしてやったのだが、少々の優越感しか生まなかつたため、ひとまず、本題に戻ることにする。

「それで、私をここに連れてきて、何の用ですか？」

「やっつと、玉兎が顔をあげる。」

「お前が、我々に用があるんだ」

理解できず顔を顰める。つまり、と玉兎が続けた。

「我々は与えられたモノを利用し、特有の商いを行っている。お前はわざわざ、その商い所である“明露”に迷った。という事は、お前が我々を必要としているはずだ」

「…知りませんよ」

全くもって身に覚えのない話に、首をかしげた。今日までそんな施設の存在に気づきもしなかった。

「？お前？に聞いているんじゃない。お前の？本能？に問いてるんだ」

再び書類に目を通し始めた玉兎はさらりと私の返答をながす。

「……………」

「せーらん、」

のんきな声が、少し低い位置からした。視線を移すと、カップ片手に足を組んで、優雅にお茶をやっている闇夜がいた。

「お茶じゃないよ、ホットチョコ」

澄ました顔でそんなこと言われても、株が下がるだけだと思う。

それより、どうやらコイツは私の思考を読んだらしい。コイツ何者だと思いきり嫌そうな顔をしてみせても、それは拾い上げなかったのか、全く気にした様子もなく、ひとまず座ったら、と私の後ろを示す。振り返ると木造の椅子が一脚、ちょこんと私が座るのを待っている。私は何も言わず腰を下ろした。

ここでは突然現れるのが日常茶飯事のようにだ。

「生活してて困ることとかない？」

例えば物忘れが激しいとか、忘れられやすいほど影が薄いとか、家の入口にある大きな石が邪魔で邪魔でしょうがないとか、あの時の思いを忘れるものか、出来ることならもう一度やり直したい、とか。

つらつらと言い並べられることは、まるで台本のように滑らかに繰り出されていった。何度その台詞を繰り返してきたのだろうと想像してみても、諦めた。多分、彼らは私が想像するよりずっと長い間、このように皮肉を零しつつ進行していき、無愛想に導き、無垢に私たちを招いてきたのだろう。ずっと、こうしてやってきたはずなのだ。変えようもない、シナリオだった。では、ここに来た何人ほどが、彼らを否定したのだろうか。彼らの差し出す手を、振り払ったのだろうか。

私は、無いですね、と答えようとして、言葉に詰まった。

「…『極度の迷子体質だった。』」

…多分、一人もいないはずだ。

目の前の二人の表情が見るからに固まる。

「…どんな風に」

事情聴取のように、尋ねる玉兎の声はやけに重い。

「えっと、ものの見事に迷うんです。左だと思っただら実は右でしたなんて起こらないことは無いし、他にも地図の通りに歩いても必ず別の所へ着いちゃうとか、誰かに聞いても数秒後にはわからなくなるとか」

「それはただの痴呆じゃない？」

ぎろりと睨んだが、笑われてかわされる。

「成程」

玉兎は言った。私は黙ってその眼鏡の向う側を見据える。

確かに、こんな不可解なことばかり起こっている中、こんな相談を真面目にしている自分が本当に愚かで馬鹿らしいのだけれど、諦めていたこの厄介な体質は、こんな不可思議なところでしか治せない気もする。

もし治るものなら。

藁をも掴むつもりで縋りたい。

「これは…厄介だな」

玉兎は闇夜を見る。一番頼りにしていた人物の思わぬ反応に、私は幾度か瞬きをした。

「えっと、何が原因なんですか？」

闇夜は闇夜で、からかうだけからかった後は黙って目を閉じている。しばらく黙ったあと、闇夜は口をあける。

「どうなってるの、コレ」

彼は、不機嫌そのものの視線を私に投げた。その刃物のような鋭さに、呼吸を忘れる。元々切れ目である上に目つきの悪いせいで、その鋭さに磨きがかかっているようだ。しばらく睨んだ後、頬杖をついてぶつぶつ言い始めた。そんな闇夜を放っておいて、玉兎は私を見た。相変わらず、固い表情のまま言うのだった。

「残念ながら、全くもって分からん」

「…じゃ、じゃあ、私は何のためにここに来たんですか？」

「お前のその迷子体質の根源がここへ連れてきたのは確かだ。だが、何なのかははっきりしない」

「世間で俗にいう方向音痴っていうのは、大抵“失路”というものが足に寄生しているんだよ。目的地までの路を食うの。でも、そんな単純そうなものに見えないし」

大分落ち着いたのか先ほどとは打って変わって、新種かなあなんて何故か嬉しそうにつぶやき鼻歌を歌いながらカップに口を付ける闇夜を恨めしく睨む。

「とうわけだ。しばらく、様子見だな」

手持無沙汰な右手を開いたり閉じたりして見る。

「……それなら、もういいです」

比較的、明るく言えたと思う。男二人が、こちらを同時に見た。

「いいって、何が？」

「解決しないなら、それでいいです。私帰ります。出口、どこですか？」

人生には、一生付き合っていかなければならないものが一つや二つあるものだ。私の場合、他人に頼っていけば暮らしていけないというものでもないし、大したことはない。大丈夫、何もがっかりする必要はない。

私は腰を浮かせた。闇夜が不審げにこちらを見ている。玉兎は相変わらず無表情で続ける。

「いや、諦める必要などない。解決方法は必ずある。しばらくここで様子を見ていれば、原因も何か分かるだろう。それに、根源を退治しない限り、ここからは出られない」

「え、でももう遅いですし、親が心配しますから」

失礼しました、と頭を下げて、周囲を見渡す。闇夜が立ち上がった

て、私の横に立った。視線が、痛い。両方あれば、かなりの威力になるだろう。だから、片目なのだろうか。

「ただ今戻りましたー！」

絶妙なタイミングで、後ろから声が出た。振り返ると、少年が立っていた。背後に、長方形の光がある。大分疲れているようだった。どこまで走ってきたのかは知らないが、好都合だ。私は迷わず身を翻す。

「茜藍殿!？」

がたりと音がしたが、何も迷うことなく茜藍光に近寄っていく。徐々に小さくなっていく光に間に合うように歩調を早める。

闇夜は、ついて来なかった。

?いつものように?、光の中に右手を入れる。手はするりと中に溶け込んでいき、こちらでは感じなかった風を掴む。

思わず、頬が綻んだ。

「あれ、茜藍さん?」

「それでは、」

私は振り返る。こちらに来て、一番の笑顔をして見せた。

「せーらん、」

「皆さん、ごきげんよう」

啞然としている男と、様子を窺っている男と、状況を把握できていない少年の目の前で、何事もなかったかのように、光の中へ滑り込んだ。

「…み……きみ、君!」

肩を揺さぶられるのを感じた。

私は、思い瞼をゆっくり持ちあげた。

夕焼け空を背景に、知らない男の人が立っていた。

「大丈夫か？今救急車を呼んでいるから、安静にしてなさい」

「…え？あ、いえ？ただの貧血で…」

私は、少しよろめきながら起き上がった。

「けれど、道で倒れてたんだ。もしなにかあるんだったら…」

「あ、や、これは持病で…よく、倒れるんですよ」

とんでもないのに捕まってしまった。内心舌打ちをする。

「…なら、親御さんに連絡するから。家の電話番号は」

「いえ本当に、すぐその角なんで、お気づかいなく…」

灰色のコンクリートの塀に手をついて、もう片方の手で学生かばんを持つ。

「ならば、家まで送っていい？」

「…あ、ありがとうございます…」

気づかれないようにため息をついた。

そんなに心配されなくとも、本当に、よくあることなのだ。原因は分かっているが、別に何の支障もない。先ほども、学校の帰り道で、倒れただけなのだ。よく覚えていないが。

男は、携帯を取り出し119を押した。しばらく何かしゃべったあと、何も言わず電話を切り、私を支えるように付き添った。スミマセン、と小さく謝る。なるべく離れて歩きたいが、そういうわけにもいかないようだ。

立ちくらみが襲って、そこから現在に飛ぶが、別段不思議にも感じない。以前に、先ほどまでのトリオとの会話の方が、不自然極まりないと思う。あの三人とのやり取りも、紗がかかってぼんやりと曖昧になってきた。

「夢…か」

五月蠅い蝉の声の中、紺色に飲まれて弱くなった赤い光が帰路を照らす。男には聞こえなかったようだ。

「……そりゃそーだ」

しばらくお互い無言で歩いていると、自宅が見えてきた。

「あ、ここです。本当に、お世話になりました」

「いや、いいんだが。気をつけなさい」

玄関前に立ち、会釈して礼を言うと、男は片手を挙げて去って行った。息をついて鞆の中から、鍵を取り出す。

「…夢、にしては、今回はリアルだったわ……」

ねえ、と言っても、誰もいない。開いたドアの向こう側に、つぶやきは溶けて行った。いつものように静かな、自宅だった。

「…でも所詮、夢は夢だわ」

あれが現実なんて、ありえない。

気配がない子どもって。

どこまでも黒い闇って。

突然椅子が姿を現すって。

? 失路? って。

? 明露? って。

いつ忘れるかも分からない、ただの儂い数分間にすぎない。

ひとまず少し寝ようと、わき目も振らず二階へ向かう。家には、家族はもちろんのこと、誰の気配もしなかった。

二階、自分の部屋の前に立つ。ドアノブに触ると季節はずれな静電気と遭遇する。驚いて手を引くが、気を取り直して改めてドアノブをひねる。ドアは何故か、ぎいっというもはしない音を立てた。

黒い羽根が落ちていた。最初は自分の足元に一つ。何だろう、と床に視線を滑らせていく。ベッドの前、勉強机、クローゼット。先に進むにつれて、床を埋め尽くしていく羽根の量はどんどん増えていった。これは、何だろうで済ませられないレベルだ。頭の中が真っ白になる。鮮明に、闇の底に艶やかに光る髪を思い出した。

最後にたどりついた真正面の窓際まで来て、真っ黒なブーツが目

に入った。

これは、どうしたものか。

答えなんか出てこないほど、パニックを乗り越えて、頭が全く働いていない。硬直したはずなのに、首だけは自動的に動いていって、足から上を確認している。床までつきそうな長い裾のコート、白いカッターシャツ、ネクタイのように結ばれただらしないリボン、不健康に白い肌。そして、何ともおかしいと笑っている目とかちあつた。

「驚いたね」

男は言った。

彼特有の、薄気味悪い笑みを浮かべて。

其ノ参

其ノ参

「…ひとまず中に入ったら？」

部屋の主である私に、夢で登場した架空のはずの人物は言った。

私は凍りついたまま、何も言えずに突っ立っている。

「…おーい。聞こえてるー？」

痺れを切らしたソレがこっちに向かって歩きだした瞬間、我に返った私は勢いよく部屋のドアを閉めた。大きな音を立てて壁が目の前に出来たが、私は息を荒くしていた。冷たい廊下は静まり返っていて、異様な速さで脈打っている自分の心臓の音が五月蠅い。

何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で

「…何してるの？」

「ひっ」

静かな声が真後ろからする。

一度治まりかけていた心拍数が再び跳ねあがり、反射的に振り返ると、腕を組んで向かいの壁にさり気なく寄り掛かった闇夜が、不思議そうな顔でこちらを見ていた。

顔から熱が消えて、腹の底に氷が転がったが、合ってしまったその眼の黒さに、出かかっていた悲鳴は拡散され息をのむ。

「早く入りなよ」

微動だにしない私に対し、血の気のない唇がそう動いたとき、ドアが勝手に空いた。空気の流れは起きるはずもない家の中なのに、風が部屋の中に吹き込んでいき、激流に体が飲まれる。

「え、ちよつと、何!？」

私は抵抗の仕様もなく中に引きずられて行った。至極楽しそうな片目が見える。

「そうそう。いい子だね」

そういう声と共に、ボタンと戸が閉まった。

床の真っ黒な絨毯の上を闇夜は優雅な足取りで、目の前の大きな満月に照らされながら歩いていく。

「さてと」

勝手に動いた私の椅子に勝手に腰かけ、足を組んでから比較的穏やかな表情で闇夜は口を開いた。

「どこから説明しようか？」

私はというと、闇夜の前まで強制的に連れて行かれて、やっと拘束が解けたかと思いきや、今度は足が地面に縫い付けられたように全く動けなくなってしまった。もうここまで来ると逃げる気力も無くなっていたのに、この仕打ちにうんざりしてわざとらしく目を回してみせると鼻で笑われた。

「…何がどうなってるんのか、最初から全部」

「始まりが見つからないから、君が何から聞きたいのかを聞いたんじゃないか」

「私は全部聞きたいの」

「…言葉、通じてる？」

「ハア、と仰々しく呆れたように溜息を吐かれて、無性に腹が立つた。」

「…大体、こんな状況でまともに話が出る方がおかしいのよ。空想人物が現実には現れるなんて信じられる？」

「愚痴に近い内容を相手に言うわけではなく、ただの独り言として言っている、ああ、と闇夜は妖しく笑った。」

「さつきはこちらでいう？夢？という空間で会ったってことだよ」

何を言っているのかさっぱり理解できず、鼻の頭にしわを寄せる私に闇夜はニヤリと笑った。

悪戯を思いついたような深い笑みに少し引いた瞬間、バサリと音が鳴って黒いものが現れた。

月明かりが遮断されて部屋が暗くなる。

「今は、俺がわざわざコレで出向いてあげたからね」

大きな鴉の翼が、背中にあつた。

呆然とそれを眺めていると、闇夜はまたにやりと笑う。次の瞬間、手品のように翼は消えた。

「ハイ、次」

何事もなかった風な調子で言われて、我に返った。

「い、今の、何？」

「何って、俺のオプシオンだけど？せーらんは、俺が普通の？人間？だと思つてたの？」

黙り込む私に、闇夜の笑みは始終消えない。私の調子を見て笑っているようにしか思えなくて、どうしても気分を害さずにはいられなかった。

「何の用？」

さっきの物が何だったのか、何がどうなっているのか分からなかったが、もしこれも夢の続きならこんな変な夢、相手に調子を合わせてさつさと終わらせるに限る。

「えーもう本題入っていいの？もっと何か聞きたいことあるでしょう？闇夜様の好きな飲み物は何ですかー？とか、尊敬する人は誰ですかー？とかさ」

おかしな者は机に頬杖をついてつまらなそうに言う。

「アンタに全く興味を抱いて無いし、正直さつさと帰ってほしいんですけど」

「ああ、そう？まあ、オレも忙しいし、そんなこと聞かれたところで不愉快極まりない。以前に気持ち悪い」

本音を漏らすと、クツクツ、と押し殺したような笑い声をあげた。気持ち悪いって何だ、とイラツとする感情を押しこめていると、仕事しなきゃね、と先ほどよりかは真剣な顔を見せて見せた。しかしそれでもまだ、見下されているような気分になるのは、多分長い間こんな表情をしていたせいで張り付いてしまったのかと、少しだけ理不尽な憐みを持ってしまった。

「さつき、オレたちは君が何に憑かれたのかわからないって言ったでしょ？」

頼杖をついて、偉そうにヤツはしゃべる。あまり、机の上の物をいじらないでほしい。特に、陶器で出来た私のうさぎちゃん。

「君が向こうから去っていくまで、全然気付かなかった。君には、気配があつたから」

最後の言葉に、脳内からうさぎちゃんは排除されてしまった。私は顔を顰める。

「…気配？」

「そう、現実と同じくらいね」

「え、気配って、おかしいのは全くなかったアンタ達の方じゃない」
うさぎちゃんの耳をいじっていた手が止まり、切れ目が私を捉える。

「違うよ。向こうでは、？無い？のが当たり前なんだ。こちら側から直接向こう側へ運んできた？者？以外は、気配が全くないんだよ。そだね、？人間？らしい言葉で言うと、普通は？夢？を通してきた？者？には気配がないんだ」

しばらく黙って考えてみる。時計の秒針の音がやけに響く。闇夜は考え込む私を見て、幼児の保護者のようににっこりと笑って待っている。それでも、ひと握りも話は掴めなかった。

「…ゴメン、最初から分かりやすく、もう一度説明してくれる？」
降参して丁寧に頼むと、意味深げに闇夜は呟いた。

「君は、？夢遊？病、なんだよ」

その言葉に、驚き呆れた。コイツ、分かりやすくって言葉の意味、知っているんだらうか。

何気ない風に、私の顔を確認した闇夜は失礼ながらも、心底面白そうにニヤリと笑った。

「気配ってというのは、現実世界の象徴みたいなもので、ただの“幻想”である夢の中では無いのが普通なんだよ。例えるなら、夢は映画のフィルムで、現実には映画を見ている空間かな。フィルムに映っている人物には気配がないでしょ？」

私は軽く相槌を打った。表面上真面目にやっているのだろうが、本当は面倒くさいなどと思っているのだろう。かなり気だるげな声色が響いている。

「この法則はどんな些細な生き物でも当てはまっているんだけど、ひとつだけ例外あってね」

「…？夢遊？つての？」

「そうそう、意外に理解力あるんだね」

私はハハハ、と顔を引きつらせて先を促した。ニヤニヤ笑う闇夜に拳を浴びせたい衝動を抑えながらただただ続きを待つ。

「？夢遊？はどんなモノにでも気配を映して、夢の中を自由に行き来させるんだよ。その夢の記憶を、？夢遊？は食べる」

「それって、」

思わず出た言葉に私は驚いて一瞬黙った。話を打ち切ってしまった。失礼になってないか、礼儀をわきまえ様子を窺ってみるが、やはり笑顔のまま闇夜は固まって待っている。

「…それってつまり、上映した映画が立体的になったってこと？」

「うん、？夢遊？に乗っ取られた人物だけね。しかも、フィルムに映されてなくても気配のおかげでそいつだけは、今ちょっと右に動いたとか、髪が風で揺れてるとか、どういうふう動いたのか大体分かる」

「…それって気持ち悪くない？」

闇夜の笑みはさらに深くなる。

「さらに、特典付きで自由にフィルムを渡っていける。侍が、自由

に西洋劇や青春ラブストーリーに登場できるわけだよ」

「…それってかなり気持ち悪くない？」

「適当に頷いた後また口を開く。相手はどうやら私の相槌には特に興味はないらしい。」

「原理としては、夢は個人を区切る厚い壁みたいなもので、気配は馬鹿でかいハンマーかな。さっきも言ったように気配は現実世界の象徴であり、夢という一種の世界を？偽り？と判断しているんだよ。夢は幻想とも呼ばれるように儂く消えてしまう弱い立場にあるから、はつきりとした存在証拠のある気配には負けてしまう。それをいいことに、気配はことごとく打ち破ってその中に入り込めてしまう。」

「あつてはいけないことなんだよ。規則違反。まあ言うてもしょうがないけどね。それに、ある意味プライバシーの侵害だよ。人の領域の中に勝手に入っていつてしまっただから。けど、ちゃんと調節できるようになりさえすればちゃんと制御できるようにもなるし、逆に望めばどんなヒトの夢の中へでも渡っていけるよ」

「一通り喋ったあと彼は何も無い宙を親指と人差し指で摘まんだ。何の前兆もなく、いつの間にかその手に収まっていたティーカップを、そのまま口に近付けていく。」

「オレらだつて実際みたのは初めてだしね」

「甘ったるい力カオの香りを吐きながら、闇夜は目を細めた。」

「君はそんな数少ないモノに憑かれた珍妙な？夢遊？病者なんだ」

「ものすごく失礼な物言いだつたが気にしていられなかった。静寂が広がる。秒針の音も、もう聞こえない。確かに私に関わる重要なことなのに、どこかの夢物語にしか思えなかった。」

「…後半部分、よく理解出来なかったんだけど」

「侍は気配を隠しきらないけれど、訓練すれば勝手に他の映画には飛ばないし、あの女子高生に会いたいと思えばいつでも会いに行けるんだよ」

「…気持ち悪い」

「散々言ってるけど、その侍君だからね」

何とも言えない沈黙の後、ため息がそれを破った。

「一発で理解できないなんて、君の頭つてどれくらい小さいの？」

「殴つていい？」

「やだ」

つんとそっぽを向いた闇夜だったが、次の瞬間にはああそうだと新たな話題を思い出したのか、また顔を戻していて、その意味深げな笑みを浮かべていた。

「君はさつきよく迷子になるって言ってたけど、本当は迷子になんてなったことないはずだよ。？夢遊？病者として当てはまっているのは、残念ながら君自身ではなく、もう一人の？君？である、夢の中の君なんだから」

言葉遊びのような、ややこしいセリフを吐きながら、彼は私の額を指で押した。

「…もう一人の私？」

「あれ知らなかったの？こちらの世界での君、今いる君のことだけど、それ以外にもう一人いるんだよ。精神世界、いわゆる夢の中の君さ。この二つの器に対して、？意識？、そうだな、名前を付けるなら？魂？つていうのかな。これは一つしか持っていないんだよ。君ともう一人の君は、この一つの魂を回しながら生きているんだ。これは君だけじゃない。生き物全てに当てはまることだよ」

壮大な話を前に何と言つていいのか分からず、ひとまずへえ、と言ってみるとさして興味もないような声が出た。何他人事のような顔してんの、と奴は少し呆れたような表情をしたが、次の瞬間には至極嬉しそうな顔をする。

「さてここからが本題です」

闇夜は足を組み直して、真つすぐ私の方を向く。気だるさなど、

「本来はそのまま放っておかれたであろうこちら側の君は、偶然にも明露に訪れてしまったいわゆる？客？と言う存在だからね。君にオレ達に救助を求める権利が発生した」

でも、どちらを選ぶかは君次第だよ、不意にまた不敵な笑みに戻る。

「君は二度と目覚めない方がいい？それとも二度と彷徨え（アソベ）ない方がいい？」

グツと私は顎を引いた。身構えるような格好になった私を面白そうに闇夜は見ている。

「…彷徨えないってことは、二度と夢を見ないってことよね？」

「そうそう。暗闇の中に永遠に落ちていくの」
唄うように闇夜は唱える。

「目覚めないってというのは…？」

「そのままの意味さ」

そんなの、決まってる。私は睨めつけるように闇夜を見た。闇夜も何かを期待したような笑みで私を見ている。

「二度と、アソバない」

その瞬間、闇夜のとびきりの歪んだ笑顔が見えたのが最後で、羽ばたく音と共に私の視界は真っ暗になった。

「ってコトだよ」

そう言って、闇夜は澄まし顔でカップを啜った。長い長い話を前

に、私はただ震えていた。刻辰が心配そうに見上げてくる。

「…全く話が見えなんだけど……」

「君は、もともと大脳だったけど腫瘍が見つかったから切り離された脳の周りの断片ってこと」

甘ったるい香りを漂わせながら闇夜がまた言う。

「…つまりここにいる私は、もともと夢の中の、？偽り？の？私？だったってこと？」

「まあ語弊が出るような説明をした俺が悪いんだけど。君の言うことが？偽り？って言うなら、オレらの存在も否定しているよね」

刻辰怒っていいよ、と口では嘲笑しているものの鋭く光る瞳は笑っていない。私は何も言えなくなった。少しの沈黙の後、ため息が響く。

「君は本物だよ」

あのね、と闇夜は足を組む。周りの暗黒がゆらりと揺れた。

「この世に？本物？？偽物？なんて存在しない。それ自身はそれ以外の何物でもないんだから。そんな価値をつけるのは人間だけだよ。君はそんな愚か者なの？と、ふっと笑う。その諭し方に首を捻った。

「…慰めてる？」

「そんな風に聞こえるなら、君は愚か者の前に、馬鹿だね」

ハハハと笑う顔に一瞥くれて、俯いた。

「…どうしようか」

これから。

いろいろと考えて、ふと気になった。

「？夢遊？って向こうの私には害でしかなかったんでしょ。私にはどうなの？」

んーと少し考えてから、闇夜は言う。

「君と完全に溶け込んでるからね。君を？夢遊？と呼んでも過言じゃないくらいだよ。別にいつもどおり、普通に生きていけばいいん

じゃない？」

「この場合、普通とは迷子のことだろうか。不安に目を白黒させていると、それまで押し黙っていたトキが机から身を乗り出した。」

「で、でも、今までどおりに生きてくつて、危ないんじゃないでしょうか！？ヨルや他のモノに捕まったら……」

今回最初の刻辰の言葉はじんわりと心に広がってきて、久し振りの癒しとなったのだが、それは闇夜の前では一睨みの原料になるにすぎなかった。

「…君はどうしたいって言うの？」

「何でそう人の嫌がるようなことするかなあ……」

泣き出しそうな少年を撫でながらため息をつくとき、何を思ったのか闇夜はまた面白そうに笑う。

「…まあ、滅多に手に入らない資料をそのまま逃がすのも惜しいね。学者に高く売れるだろうな、と恐ろしいことを言うてのける。こいつには、血も涙もないのだろうか。」

「…茜藍さん、玉兎さんのところに行きませんか？」

顔を引きつらせていた私に勢いよくあげた刻辰の顔は、意を決して言ったのか、少し頬が赤みを帯びていた。

「…え？」

「明露で生きていくには、契約が必要なんです。空間を渡っていてもいいですけど、わざわざ危ない所に行く必要はないんじゃないでしょうか。それに、いくら珍しいと言われてる？夢遊？であったとしても、玉兎さんの契約の前では大分力は抑えられるはずですよ。強い意志のある目が、幼い体に似つかわしくなく力強く思えた。」

「…え、でも、大丈夫なの？」

闇夜の方を見ると、好きにすればとカップを啜っている。

「行きましよう」

刻辰がぐいっと手を引いた。

「…とは言つても、闇夜も言ったようにお前自身が？夢遊？のようなものだからな。？食えない？と分かればどうするか」

考え込む玉兎を見て、隣で刻辰は黙り込んだ。

「…だったら、」

私は口を開いた。

別に特別ここにいたいというわけでもないけれど、今はどうしても自分の居場所がほしかった。ここを 失えば、私は完全に一人になつてしまうのが分かつてつらかった。

一人は辛い。それが、何故か痛いほどよく分かつていた。

「空間を渡つて行きながらここに利益があるようにしたらいいんですよね」

何かないか、と頭をフル回転させた。自然とやってきた重たい沈黙に押しつぶされそうになりながらも、考えることをやめない。耳鳴りがする。考え過ぎて頭の奥が熱い。

「…そういえば、」

不意に静かに、玉兎が口を開く。弾かれたように私と刻辰は玉兎を見上げた。

「案内人、というのがここにはいない」

視線はどこか遠く、涼しい顔で玉兎は続ける。その眼鏡のレンズに、小さな少年と少女が映って見えた。

「客がここに辿り着くまでそれなりに時間がかかるものだ。その間に手遅れになることが多々ある。だがここから出られるのは闇夜のみだ。アイツは使えん」

案内人を雇いたいんだが、誰かいないものか。

私は自然と頭を深く下げていた。

「さて、契約だが」

玉兎が軽く腕まくりをする。

「何がいいか…」

隣で飛び跳ねるくらい喜んでいた刻辰がとたんに不自然なほど静かになっていった。刻辰がそわそわと挙動不審になっている。多分、否絶対、私に関わる大事な話なのだろうが、全く理解できていない。「目がいいんじゃない？」

私たちの背後から突然聞こえた声に見向きもせず、玉兎は首を振る。

「？眼？はお前達で足りている」

思わず振り向いて闇夜を見た。何、と隻眼で睨まれる。

「そ、それじゃ目の色素はどうでしょう」

「…目、こだわるね」

斜め下の頭を見つめて呟くが、少年はわたふたと続ける。結構混乱しているようだった。

「ほ、ほらこの間訪問された、…名前なんでしたっけ」

「？月の方？」

闇夜の言葉に大きく頷く。

「ああそうです、？月の方？がぼやいてたじゃないですか。漆黒の目がほしいって」

「……」

どうでしょうか、と刻辰は黙り込む玉兎と顔色をうかがう。ついでに説明してくださいと私も様子をうかがう。

「…それでいいか」

静かに、何の説明もなく玉兎は頷いた。刻辰の安堵の息と同時に、眼球に刺すような痛みが走る。

「…ッ!？」

思わず座り込んで目を隠す。茜藍さんっと言う少年の声が遠くで聞こえた。

「清紫 セイシ 茜藍 セイラン」

玉兎の声が鼓膜に張り付き、脳内で渦を巻きながら響き渡る。けれどそれ以上に激痛のあまり、言っている内容は理解できず気が遠

くなつていく。何干という小鳥に、鋭い嘴でかわるがわる突かれて
いるようだ。

「…あ…あッ…」

「？夢遊？の宿りしその名のモノ、明露従者と任命す」

当然のことながら、目を押さえても何もならなかった。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い

「契約名、」

？漂案屋？

突然刺すような痛みが消えた。

ゆっくり両手を離すと、目の前にトキの顔があった。

「…金色に、なっちゃいましたね」

え、と呟くと、どこから取り出したのか素早く手鏡を渡される。

真つ黒な髪に似合わない、そして肌の色とかなり不釣り合いな、
金色な瞳がそこにあった。

「これは…カラコンをいただけませんかね」

「カラコンのために色素取ったんだ」

全く、とため息を吐かれた。でもこの状況は、我ながら居た堪れ
ない。

「…もともと鏡見るの嫌なのに、これじゃもつと見てられないわ」

独り言を言いながら鏡を見ても、どうしようもない話ではあった。
元はと言えばここにいる代償として盗られた色だ。自業自得としか
言えないのは分かっている。それでも、私の意見も取り入れず勝手に
行われた儀式にはある程度文句を言ってもいいではないか。

「…分かったよ。本当にもう、しょうがないなあ」

ため息を吐きながら、闇夜が動いた。思わぬ事態に、幾度かまば
たきをする。

「え、何どうしたの？」

「黒がいいんでしょ。ったく、オレと色被るから、あまり好ましく

は無いんだけど」

私の前にしゃがみこむと、やれやれと呟きながら瞳を確認する。

「ただし、？夢遊？が起きてる時は、金色になるからね」

注意事項だけ報告すると、闇夜は自分の背中に手をまわして、宙を掴まむ。不意に現れた黒い、鴉の羽を私の目に近付けた。視界が黒くなるが、羽根の隙間から、企んだような笑みが垣間見えた。

「その分の代償としてちゃんと働いてもらうから」

「えっ」

闇夜が言つと、奴隷のように使われているのしか想像できない。

多少の冷汗を感じながらふと視界の端の玉兎を見ると、黙ってこちらを見ている。

「…反則ですか？」

「……」

「気にしない、気にしない」

笑みの含まれた声と共に、羽が視界から消え失せた。

「そら、どうでしょうか、お嬢様」

向けてきた鏡には、ちゃんと黒い瞳の自分が映っていた。

「…ありがとうございます。大変お騒がせしました」

「…どうしましょうか」

次に聞こえてきたのは深刻そうな刻辰の声で、隣で何か必死に思索している。

「…彼はどうしたの」

聞くと、ああ、と闇夜は呆れたように肩をすくめる。

「象徴になる動物をつけるんだよ。ここでは仮に宿るモノが必要になるから。記号って言うんだけど」

無いとあまりにも不安定なんだよ、と説明するモノクロ男の連想をする。

「…闇夜は？鴉？？」

「玉兎は？兎？。光夜は？銀孤？。本人は？鳩？」

頷きはしなかったものの、妙な確信が芽生えた。

「…光夜つて？」

「客だな」

突然、玉兔が反対方向へ歩き出した。遠くで、チリンと鈴の音がする。

「茜藍、さつさと来い」

「あ、ハイ」

ああこれから、こんなにも好き勝手やってる彼らにつきあいながら暮らすのか。…後先、不安だ。

「…あつ」

刻辰は私を見上げた。にっこりと満足げな笑顔を浮かべている。

「決まった？」

優しく微笑むと、大きく頷いた。

「ハイッ！！」

茜藍さんは、？黒猫？です。

「了」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1385z/>

明露神奇談

2011年12月4日23時49分発行